

1

向
かう

波

落石

秋分

世界

金庫

2

感

ボ
ー
っ
た

チ
ー
ム

(2I 完答)

3

工

工

イ

ア

ウ

少
し
大

ウ

ひ
ど
い

知
ら
な
い
こ

確
認
す
る

「
考
え
る
」

実
用
的

言
語
生
活

ウ

工

ア

自
身
の
使
い
方

言
語
に
は
「

よ
む

配点	
1	各2点×6=12点
2・3	各4点×22=88点
〈計〉100点	

- 1 「向」の「口」は三画である。一画一画をはっきりと書く意識を持つよう。
- 2 「波」の五画目には注意しよう。右から左にはねるイメージで書こう。
- 3 「落」の部首は「くさかんむり」である。「さんずい」が部首のような書き方にならないようにしたい。
- 4 「春分」「夏至」「秋分」「冬至」など季節に関することばはたくさんある。いろいろ調べてみよう。
- 5 「世」は二画目から四画目の筆順に特に注意して書こう。
- 6 「庫」の「車」が「東」にならないように気をつけよう。

2

- 1 「心」ということばは「本心」「中心」「親心」「安心」「得心」など挙げればきりがなが、もちろんここでは思いついたものなら何を入れてもいいというわけではない。きちんと前後を読んで、ふさわしいものを入れるようにしてほしい。直前に「えらいなあ。なんでもパツと決められるんだな、ひかりは」とあることから考えよう。
- 2 何も起こっていないのに——線②のようなことを言うはずがない、何かあったはずだ、というように考えてほしい。さらに、これを言われているのがわたしだということもあわせて答えを考えていこう。
- 3 もちろんわたしがまんしている様子を本文中からさがしてくるのだが、「お母さんがこのように言うのはわたしのどういう様子を見ているからですか」とあるので、お母さんが見ていると思われるわたしの様子をさがそう。
- 4 I まず、本文のどのあたりを読んで答えを考えていくべきかを考えよう。ここでの「シール」はもちろん、九九のシールのことなので、それに関するところはどこからどこまでかを確認しよう。すると、「かけ算九九を」から「沙夜も笑った」までだとわかるだろう。その中に「わたしはシールをもらえずにいた」という部分がある。さらにその直後に「わたしは、ついゆずってしまった」とあることから考えよう。
- II Iと同じようなやり方で答えにたどり着こうとしても沙夜の性格にあたることは見つからなかったはずである。では次にどうしていくか。文章前半では沙夜はでてこなかったのだから、沙夜が出てくる文章後半からさがしていくよりほかにはないだろう。シールをもらうためには先生に九九を聞いてもらわなくてはならないのだが、もらえていないということは九九を覚えていないか、それ以外に何か原因があるということになる。ただ、「沙夜も九の段まですらすらいえた」とあるので、前者の可能性はなくなる。覚えているのに先生に言えない、という状況をイメージしながら性格をあらわすことばをさがしてほしい。

- 5 わたしと沙夜はぜんぜんシールをもらえていないのだから、先生からは九九を覚えていない生徒に見えるだろう。「なーんだ」は先生の意外な気持ちのあらわれである。
- 6 表情には心情があらわれている。それぞれの（ ）の前後から心情を考えて、それに近い表情を考えよう。
- 7 わたしの前で安心してストローをくわえたときである。みんなが沙夜のことをへんな子だと思っているなか、わたしはなんとも思っていないことを沙夜が知った、ということから考えてほしい。

3

- 1 ◎の文のことばが本文のどの部分と対応しているか照らし合わせながら考えよう。◎の文の「自身が母語としていない言語の辞書」と本文の「スペイン語を母語としていない人がスペイン語の辞書を使って何かを調べる」が、◎の文の「自身が母語としていない言語の辞書」と本文の「日本語を母語としていない人が日本語についての辞書を調べる」がそれぞれ対応している。
- 2 I 線②の直後の段落で「よむ」とはどのようなものが説明されているので、ここからさがそう。「〜と筆者は考えていますか」と聞かれているので、本文の「〜と思う」という表現とも結びつけやすい。
- II 「本文中のここより前の部分から」という指定を守ろう。——線②をふくむ段落から、オンライン版は「余裕の気分」も何もなく、情報を引き出すものであり、「よむ」という側からは遠いということがわかる。ひとつ前の段落の最後の「その『余裕』の気分は実用的ということからは少し離れていて、『よむ』という側に少しちかいうように思う」という部分から、「よむ」の反対側は「実用的」だとわかる。
- 3 線③のあとを読み進めると、本や新聞を読むことでいろいろな種類のことばにふれられるということがわかる。本や新聞などを読むことをまとめた四字のことばをさがそう。
- 4 文章後半に「辞書をよんで『ああでもないこうでもない』と考えることも大事だし、だからこそ、それを楽しみたい」とある。そもそも、本文全体から、辞書をよむことに対する筆者の前向きな気持ちを読み取れるだろう。
- 5 Aの直前に「本をあまり読まないということになると」とあるので、Aには「はなしことば」であるエがはいる。残りはすべて「書きことば」がはいるが、「新聞などで接している」という表現からBにはウ、「新聞にはほとんど使われない」という表現から、Dにはイがはいることとなる。
- 6 線⑤の直後に「自身の使い方と異なる使い方をみると間違っているのではないかと思う」とあるが、これはまさに「自身の使い方」に自信をもっていることとあらわれだろう。
- 7 線⑥の「そういうこと」と直前の一文の「そういうこと」は同じ内容を指している。しっかりとって考えよう。
- 8 「文章の見出し『文章の話題』なので、筆者がこの文章で何の話をしているかを考えよう。文章が『筆者が、『日本国語大辞典』全巻をよんだ』という話からはじまっており、『よむ』という側に少しちかいう」と考えることも大事だし、だからこそ、それを楽しみたい」など、終始「辞書をよむ」ことについて述べているので、これが話題だということになる。